

# 倉橋賞を受賞して

広田 清正

私の園では昨年来、先生方が「幼児の科学的認識」といういかめしい課題にとりくんで、ささやかな研究を進めてきたが、何一つまとまらず、今だに暗中模索の域を脱していないのが現状である。にもかかわらず、今回、盲蛇におじずの類か、大胆にもこの未熟な研究の一端をひっさげて、日本保育学会の発表会に参加することになったのである。求めるものは、ただ広く天下に教を乞うということだけで、他意はなかった。

しかるにこれがはからずも、保育学会最高の荣誉である倉橋賞に値しようとは、全く驚きであり夢のようでもある。それだけに先生方のよるこびは倍増され、私の感激もまたひとしおである。何よりもうれしいことは、これによって先生方が幾分でも自

\* 信を強め、今後の研究に明るい見透しをもって進むことが出来ることである。

\* なお私の園は古い校舎の転用で、見るべき施設は一つもない全く文字通りお粗末な一地方の幼稚園であるが、かかるところに勤務する先生方の研究が、全国的に認められたということは誠に尊いことである。  
(四日市市立中部幼稚園長)

## \* 坂倉 哉子

日本保育学会に昨年入会し、このたびはじめて地方より発表に出まして、その会に参加された方々の、御立派な研究発表や、熱心な聴講ぶりに、私も一端の学者でもあるかのような気持ちになって、そのふんいきを満喫し、会に参加したことが、私自身、非常にプラスになったこととよろこんでいました。ところが、倉橋賞まで私達に——というこの思いがけぬ出来ごと——に、全く夢のように、御立派な先生方から「おめでとう」「立派でしたよ」と身に余るおことばを

数々いただき、この上もない幸せが、我身にひたひたと感じられました。そして共に研究を進めた方々に早くしらせたい——、この喜びを共に分かちたい——ともう心は四日市の先生方の笑顔に移っていました。成果のあったことは、何よりもうれしいことでしたが、果して私達のやってきたこの未熟な研究が、それほど認められるに値するものなのだろうか、何だかはずかしいような気持ちも手伝って今までの研究の足どりを考えなおしたような次第です。

そして受賞したことで少しずつ自信が出来る、この研究の目が開けてきたような、また意味のある仕事のようにも思えてきました。

今後も、この自然の領域について研究を進める上に、この賞が「しつかりととりくんでいこう」という強い励ましのことばとなつて、私の胸にのこり、心さやかに帰途につきました。お茶の水の校庭の木々の緑にもにて——。

(同幼稚園教諭)